

天馬の記

劇作家

岡部耕大

(41)

わたしの古い友人に朝長昭生氏がいる。『存じ、トモナガ』と読む。某地方新聞の記者であつた。わたしを初めて新聞に取り上げた人である。東京文局に在職している時には、よく我が家を訪ねてみえた。東京支局は新橋にあつた。新橋の居酒屋でもよく飲んだ。

脚本家の市川森一さんを紹介してくれたのもこの人であつた。市川森一さんは長崎のテレビ番組で対談をした。その対談のセッティングをしたのが朝長さんである。豪放磊落な人

で「クガハハハ」と大胆な笑いをしながら、目だけは繊細な人促したが「一人ではないので、ご自宅で」といつてきかない。わたしは女性を同伴している。ある夜、わたしは東京・下北沢の行きつけのスナックで飲んでいた。演劇人や映画人が集まるスナック「絃子」である。そ

た。朝長さんは女性を同伴していなかったのである。新橋か銀座のネオンの雰囲気がある女性であるスナック「絃子」である。そして、朝長さんはその人をオソの雰囲気がある女性であるスナック「絃子」である。そ

うも、朝長さんはその人を朝長さんは女性を同伴していなかったのである。新橋か銀座のネオンの雰囲気がある女性であるスナック「絃子」である。だ、自称である。女優になるのは難しい条件があることは前に書いた。

いよいよ。下北沢に来ることをしなが、目だけは繊細な人促したが「一人ではないので、ご自宅で」といつてきかない。しかし、洒脱になり、いかに女性が損な商売かを話題にしてお聞きとなつた。売れる人はひと握りである。どの世界も同じ朝長さんが長崎の本社に戻ることになります「いま下北沢で飲んでいます」と電話があつた。朝長さんが長崎の本社に戻ることになります「いま下北沢で飲んでいます」と電話があつた。

某地方新聞の記者



「おカベ・こうだい」1979年に肥前松浦兄弟心中で岸田戯曲賞を、89年に「典也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事、松浦市で毎年、子供たちにミニージカルを指導している。川崎市在住、70歳。

すれば、その日からその人は女優である。免許はない。たしかに女優になるのをほんとうに女優が損な商売かを話題にしてお聞きとなつた。売れる人はひと握りである。どの世界も同じ朝長さんが長崎の本社に戻ることになります「いま下北沢で飲んでいます」と電話があつた。朝長さんが長崎の本社に戻ることになります「いま下北沢で飲んでいます」と電話があつた。

(松浦市出身)